

# 未刊詩の中の中原

安眞姫

詩集と詩論を見る限り、不断なる意志をもって自己同一性を求めていく中原中也是、「永遠な自己を感じること」<sup>(1)</sup>により、本質的な存在への省察が経験できたかのように思われる。しかし、彼の清書による刊行詩篇とは異なり、未刊詩篇にみられる世界は、自己を棄てることと、その一方、自分自身を頼みとすることとが、詩人の言葉に反映されて頻繁に語られている。

テンピにかけて／焼いたるか／あんなへナチヨコ詩人の  
詩＝百科辞典を引き廻し／鳥の名や花の名や／みたこと  
もないそれなんか／ひつぱり出して書いたつて——だ  
がそれ程想像力があればね——＝やい！／いつたい何が  
表現出来ました？＝自棄のない詩は／神の詩か／凡人の  
詩か／そのどつちかと僕が決めたげます

「(テンピにかけて)一九二四年春・夏(新編二、四七一  
四八頁)\*

「みたこともない」ものを「百科事典を引き廻し」、想像力に託して表現する「へナチヨコ詩人」の詩に対して苛立つ詩人は、表現されたものに対して「何が表現出来ました？」と反問している。また、表現されたものとそれを表現する主体のことを全否定し、「自棄」する詩人の選択の特権を誇示している。そのような自己膨張は、自分のことを卑下すると同時に「神聖」視するという極端な立場とともに含んだ、「自恃」の意識へと姿を変えていく。

かつて私は一切の「立脚点」だった。／かつて私は一切の解釈だった。＝私は不思議な共通接線に頼りて、／倫理の最後の点をみた。＝(あゝ、それらの美しい論法の一つ一つを、／いかにいまこゝに想起したいことか！)＝(いかにその日の私の見窄しかつたことか！／いかにその日の私の神聖だつたことか！)「中略」その時私は何か？ たしかに失った。＝自恃をもつて私は、むづかる特権を感じます。＝かくて私には歌がのこつた。＝私の歌を聴

いてくれ。

「処女詩集序」一九二七—二八年（新編二、一三六—一三九頁）

右の「美しい論法」のような述志を内容としている詩は、極端を包摂する詩人の思想を明らかにしている。これは、翌年書かれた第一詩集『山羊の歌』に収録された長編詩「盲目の秋」の中心的な詩想とも関連が深い。以下に、その第二節を引く。

人には自恃があればよい！／その余はすべてなるまゝだ  
……＝自恃だ、自恃だ、自恃だ、自恃だ。／ただそれだけ  
が人の行ひを罪としない。＝平気で、陽気で、藁束のやうにしむみりと、／朝霧を煮釜に鎮めて、跳起きられればよい！

「盲目の秋」『白痴群』一九三〇年四月（新編一、五八—五九頁）

無限に開かれる莊重な自然を背景として、青春の敗北意識を抜けていく第一節とは打って交わって、第二節に入ると、右のように「自恃」を叫びかけて失われたアイデンティティを必死に取り戻そうとしている。

前掲の詩「処女詩集序」では、第六連において、「完き従順の中に／わづかに呼吸を見出だし」た結果、「忘恩な生活の罰」とも思えるほどに「統覚作用の一摧片をも持た」ない詩的自我を語り、結局唯一の「生命の動力学」である「自恃」の意識を持ち出すにいたっていた。そのため、「盲目の秋」にみられる激しい自負の意識と比べて弱い印象を受けがちである。しかし、「盲目の秋」で感じられる情緒の激しさとは違って「処女詩集序」の場合は、冒頭から詩想の論理を冷静に述べているのがわかる。かつて一切の「立脚点」だった詩的自我は、また「一切の解釈」であり、ついには「倫理の最後の点」に立ち会うようになる。それは「不思議な共通接線」に留まる者が述べられることであり、意識の両極が俯瞰できる境界線上で吐く詩人の哲学である。

ここで、「自棄」を歌った「（テンピにかけて）」と「自恃」を披瀝した「処女詩集序」、二つの詩が制作されたと推定される時期は、詩集『山羊の歌』におさめられる詩群の書かれる年次から外れていることに注目したい。両詩の制作時期は、『山羊の歌』に収録される代表的な詩篇、「サーカス」「朝の歌」などの制作時期一九二五—二六年、また、「盲目の秋」「汚れつちまつた悲しみに……」などが書かれる一九二九年のいずれにも重ならない。同時期に書かれ、詩集への選考に落とされたわけではなく、それぞれ別の時期に書かれており、しかも

引用した両詩が書かれた時期には、刊行詩はほとんど書かれずに多くの詩篇が未刊のまま制作されていたのである。「山羊の歌」の詩篇が五部立てという分類にふさわしく詩篇の情緒もある程度類似しているといふ印象を踏まえると、おそらく中原は、制作時期に合わせ、照応する内容の詩群を意図的に創作及び選考していたのではないかと思われる。

そのような意図的な選考の例は、一九二九年に制作された、『山羊の歌』所収の「寒い夜の自我像」とその初稿を通して確認できる。刊行された「寒い夜の自我像」定稿は初稿の第一節だけが抜き出されたものである。しかし、定稿と初稿の第二・三節とは、内容と形式においてははっきりとした違いがみられる。定稿は、まず全三連（一連―九行、二―四、三―二）構成で、破調はみられるものの七七調を基調にしている。ただ注意すべきは、最後の二行にきて、それまでの陰暗な雰囲気と詩的自我的怠惰を諷めながら、倫理的な自己暗示をもつてしめくくられていることである。

陽気で、坦々として、而も己を売らないことをと、

わが魂の願ふことであつた！

「寒い夜の自我像」『白痴群』一九二九年四月（新編一、六八頁）

結論的なしめくりをつけることについて、大岡昇平は、中原の精神の習癖と見なし、またそれらはいてい推敲されて消されると言っている<sup>(4)</sup>。しかし、定稿は、草稿から詩集に掲載されるまで複数の推敲の過程を経ており、「倫理・論理的なしめくりの詩癖」はむしろ初稿からは見いだせず、定稿の中で詩全体を特性づける要所となっている。

杉本春生は、定稿を絶対者への祈りが明確に表現された詩の嚆矢と評し、内面的な苦悩に対する抽象的な表現が整えられている作品だと評価している。しかし、定稿にみる、自我の正体性回復を祈願する安静感に反して、初稿では「自分を売る悲しみ」や「生活を言葉に換えて」しまふ自己「墮落」と情弱さを実め嘆いている。第一節の主な韻律だった文語七七調は用いられず、自由律で感情が吐露されている。

ああ、それは不可なことだ！／降りくる悲しみを少しもうけとめないで、／安易で架空な有頂天を幸福と感じ做し／自分を売る店を探して走り廻るとは、／なんと悲しく悲しいことだ……＝3＝神よ私をお憐み下さい！＝私は弱いので、／悲しみに出遇ふことに自分が支へきれずに、／生活を言葉に換へてしまひます。／そして堅くなりすぎるか／自堕落になりすぎるかしなければ、／自分を保つてくれないやうな破目になります。〔中略〕ああ

神よ、私が先づ、自分自身であるやう／日光と仕事とをお与へ下さい！

「寒い夜の自我像」初稿一九二九年一月二十日（新編二、一六四—一六五頁）

詩的自我の感じる不安な現実感、内的な統一の喪失に耐えられず、空虚な言葉に対処してしまふ柔弱な姿を射影している。右の最後の、神に向かつての訴えかけは、定稿の終連にみる安定を保った倫理的なしめくりとは異なる。それは、現実から否定される自己を徹底的に対象化して、詩人の「仕事」をも自己確認をも見つけられない自身をさらに否定し、統一した新しい自分を切に求めるために排泄する、詩的自我の激情にみちた独白である。

『山羊の歌』所収作品について吉田潔生は、「盲目の秋」のモチーフが、「寒い夜の自我像」（定稿）で自恃と忍耐の自覚に立ち戻ると分析しているが、以上の考察から、吉田の言う、絶望から自覚、さらには静謐へという流れは、明らかに意図的に構成されたものにほかならないということが判然としてくる。『山羊の歌』について言われるそのまとまった構成のプロセスは、この後第二詩集『在りし日の歌』（一九三八）にみる諦念の情緒へと展開されていくのである。しかし、それは、未刊詩篇に現わされている、主体の自負と自墮落の間で繰り

返される自己言及性、その相反する詩想が共存する色合いとは相容れない世界である。両詩集を貫く自意識は、結論めいた安靜の世界へたどりつくための通過儀礼となっているが、その内面に拡がる拮抗の様相<sup>(8)</sup>は、ありのまま未刊詩篇の世界に残っているのである。

\* 引用詩は、大岡昇平（他編）『新編中原中也全集』第一・二巻（角川書店、二〇〇〇—二〇〇一年）による。引用の末尾に「詩題」、年度、（新編巻数、頁）と略記する。年度のところには、未刊詩篇の場合、制作時期又は推定可能な制作年度を記し、刊行詩は初出誌とその刊行年度を表す。本文・脚注に間接引用するときは、未刊詩篇の場合、「詩題（制作された上限とみた年度）」と記し、刊行詩は、「詩題（『初出の雑誌名』その刊行年月）」と示す。未刊詩の表記において、「（）」内の詩題は、『新編全集』の編者による。それは、もともと題名のない詩篇の最初の行をとって仮に用いたものである。

紙幅を考慮して、記号（／）は行変え、＝は連変え）を用いる。しかし、脚注に使われている記号／は、異なる文献及び詩篇を並列するとき、その区切りとして用いることもある。さらに、脚注で引用するテキストの内容は、詩篇の場合（～）に、詩篇以外の文献は「」に収める。

（1）中村文昭『中原中也の経験』（冬樹社、一九八〇年九月）、三十三頁

(2) 一九三四年十二月東京文圃堂から刊行された中原の第一詩集。

彼の生前刊行された唯一の詩集であり、収録された四十四篇の詩には、過剰な自意識による生の倦怠の情緒が流れている。延べ五部立て。倦怠の動機が内在されている「初期詩篇」、現実において挫折された青春の抒情が観念的に昇華されている「少年時」「みち」「秋」、詩人の人生と詩業を総括した「羊の歌」に構成されている。吉田熙生は、「初期詩篇」においては、「気分」という中原の自己に対する関わり方と、「愛」という他者に対する関わり方が萌芽の形で重なり合いながら、さまざまな技法的な試みとともに示されていると言い、「少年時」においては、詩「少年時」から「寒い夜の自我像」へという詩人の自覚を強調する軸と、「盲目の秋」から「木陰」「夏」に到る絶望・喪失・悔恨の軸とが交錯しながらこのパートを構成していると分類している。「みち」には、詩人の倫理的な気質に基づいて「幸福」という思想的な主題に転調してしまう傾向がみえ、その主題を詩「汚れつちまつた悲しみに……」などの悲しみが伴奏していると言う。「秋」にいたっては、死後の自分という趣向の秋が置かれ、詩人が現実的な存在感の喪失に到りつつあることが感じられると。また、この時詩人が回帰する至福の幼年時のイメージが幻想的に描かれていると言っている。「羊の歌」にいたっては、詩人の使命に対して一筋の意志を示そうとし、それまでの「倦怠」も自己の感情の奥底に潜む根源的な気分としての位置を与えられると分析している。…吉田熙生(編)『中原中也』(角川書店、一九八一年四月)、四六一—四八頁

(3) (きらびやかでもないけれど)この一本の手綱をはなさず／こ

の陰暗の地域を過ぎる！／その志明らかなれば／冬の夜を我は嘆かず／人々の憔悴のみの愁しみや／僅れに引連される女等の鼻唄を／わが瑣細なる罰と感じ／そが、わが皮膚を刺すにまかす。＝蹠踏めくまに静もりを保ち、／聊かは儀文めいた心地をもつて／われはわが怠惰を諫める／寒月の下を往きながら。＝「後略」「寒い夜の自我像」(『白痴群』一九二九年四月)。(新編一、六七—六八頁)。

(4) 「彼は論理的にか倫理的にか」「中略」その詩篇になんらかの結論的なしめくりをつけなければ気がすまないという精神の習癖を持っていた。(彼がシェイクスピアの四四四二のソネットに特別の愛着を持っていたのは、このためである。)それらはいいてい推敲されて姿を消すのだが、「後略」…大岡昇平『在りし日の歌』(角川書店、一九六七年九月)、五一—五二頁

(5) 推敲過程…第一次形態—草稿、一九二九年一月二十日制作(草稿末尾に日付)／第二次形態—『白痴群』創刊号一九二九年一月二十日—二月制作時掲載前の推敲／第三次形態—『山羊の歌』一九三二年四月六月詩集編集時に推敲推定…大岡昇平(他編)『新編中原中也全集 詩I 解題篇』第一巻(角川書店、二〇〇〇年三月)、一一—五頁

(6) 杉本春生「寒い夜の自我像」『國文學 解釈と教材の研究』(中原中也 詩の内部) (學燈社、一九七七年十月)、六三頁

(7) 吉田熙生(編)『中原中也』(角川書店、一九八一年四月)、四七頁

(8) 詩的自我の身体的な反応の①笑い、②泣き、③眠りなどに関する未刊詩篇の表現は、各々相反する意味合いが絡み合う形で現

われている。①まず、他者からの笑(雲の笑「無題(あゝ雲はさかしらに笑ひ)(一九二七—一九二八)・笑める巷「かの女(一九二六)」・世界の理知を笑い「地極の天使(一九二七)」・拵えた笑「浮浪(一九二七)」・ネオンライトもさざめき笑「(宵の銀座は花束捧げ)(一九三三)」と、その反面をなす自嘲(則とともに歩く男への物笑ひ(題を附けるのが無理です)(一九二四)・俺としたことへの笑「夏と悲運(一九三七)」の様相が相ぶつかっている。「笑い」については、悲しみ呆けている詩的自我の心と疎通の塞がれた世間の朝の風景(かなしみ(一九三六))や、(朝日のもとに笑をひろげ「冷酷の歌(一九二九)」・駅長さんの笑ひ「桑名の駅(一九三五)」と(いとしい者の無邪気な笑ひ「山上のひととき(一九三五)」)を素直に受けとめる明るい面もみられるが、逆に笑いの暗い面を、類似した素材を用いて現わしてもいる。とくに(昔の喜びに笑ひ「秋の日曜(一九三二)」)は、(悔とさびしい微笑と此の世の親しみとの、纏れ合「疲れやつれた美しい顔(一九三二)」)う様相も帯びるが、(暗い後悔、根強い疲労、破笑にみちた私の過去「木陰(一九二九)」)として先ず描写され、以降(過去の淋しい微笑「四行詩(山に登つて風に吹かれた)(一九三五)」)という対立的なイメージを固める。ひとつ面白いことは、(賢者の笑ひ「悲しい歌(一九三四)」)に関する詩的自我の述志であるが、「貯まつてゐる憎悪」のために笑う一般の人間と違つて、「私が見た彼」のそれは、「笑つたことを悲しみ、／その悲しんだことをまた大したことでもないと思」うものであると語り、まさにここで自他による笑いを否定放棄していることが確認で

きる。②「眠り」の場合も、自己疎外(原が疲れて眠る「秋の夜(一九二八)」・眠れよ、よい心「童女(一九三六)」・僕は睡らうか……／懐しきものみな去ると「いちぢくの葉(夏の午前よ、いちぢくの葉よ)(一九三三)」)とその深化(眠るがやうな悲しき／燃ゆる日の彼方に眠る。「夏(血を吐くやうな倦うさ、たゆたさ)(一九二九)」、またその一方、他者から疎外されること(過去は淋しく微笑してゐた／町では人が、うたたねしてゐた?「四行詩(山に登つて風に吹かれた)(一九三五)」)に有効に使われていることが分る。③「泣き」に関しては、自己浄罪と自己道化の印象が与えられている。(夕は泣くのでございませ、獣のやうに。／獣のやうに嗜欲のうごめくまゝにうごいて、／その末は泣くのでございませ、肉の痛みをだけ感じながら／絶えざる呵責といふものが、それが／どんなに辛いものか、もう既に辛い私を／おまへ、見るがいい、よく見るがいい、／ろくろく笑へもしない私を見るがいい!／物音が微妙にいりまじつて、しかもその一つ一つが聞える。／神様、これが私の只今でございませ。「冷酷の歌(一九二九)」)自己道化の場合には、「泣き」の感覚に他種の感覚を生じさせているところがある。(あとで泣いたるわたくしは／滅法界の大馬鹿者で、「孤児の肌を唾吐きかけて)(一九三二)」・永遠の夜の浪、其処に泣く無形の生物「道化の臨終(一九三四)」・暖を忘れぬ紺碧を……／涙も流さず 僕は泣き、／紫色に 泣きます。「道化の臨終(一九三四)」)